論文

山口鷺流台本の系統（六）―春日庄作自筆本をめぐって―

稲田秀雄

（承前）

前号に引き続き、春日庄作自筆本所収曲の系統的分析を行う。まず、『第壹号□部　狂言初番　大名事』に収める最後の曲「靱猿」を検討する。

33、「靱猿」

【大名が外出する理由】

春日本の大名は、以下のように「野狩り」に行くと言う。

長々の在京で気がくつして悪イ　けふは山一ツ野狩りに行かウト思うが何ニと有ふそ

こうしたせりふがあれば、大名が弓矢を携えていくのは極めて自然である。鷺伝右衛門派では、享保保教本に「夫ニ付身モ此中内ニ斗居レハ気カ屈（クツ）シテワルイ　今日ハ少ト野遊ニ出ウト思フカ何トアラウ」、常磐松文庫本に「此間（あいた）ハ内に斗いて気かくつしてわるい　けふハどれへぞねらいに出うと思ふか何と有ふぞ」とある。

鷺仁右衛門派では、寛政有江本に「此比ハ何方へも行かねハ気か屈してわるい程に行かふと思ふか何とあらふ」「何と某此ことくに靱を付て折々狩野に出るを世間てハ何ともいわぬか　（太郎冠者）御意のことく御前の常々狩野に出させらるゝによつて殊外矢つほにこまかに御座ルと申して何茂ほめまする」というやりとりがあり、狩りに出ることは明らかである。杭全本は「ケフモ例ノ野遊ニ出ウト思カ何ト有フゾ」、安政賢通本は「この間はいづ方へも行かねば気が屈したによつて、今日は例の猟に出うと思ふかせ何とあらうぞ」、賢茂五番綴本は「此間ハいづ方へも行かねバ。気が屈したに依て。今っ日ハ何方へぞ狩に出（イデ）ふと思ふが何と有ふぞ」とある。

大蔵流では、虎明本に「今日は一段の天気じや程に、野遊ひに参らふ」、虎寛本に「永々在京すれば、心が屈してあしいに依て、けふはどれへぞ野遊山に出うとおもふが、何とあらうぞ」、山本東本「ながなが在京致せば、心が屈して悪しゅうござるによって、今日は野遊山に出うと存ずる」、茂山真一本「ながなが在京致すところ、心が屈して悪しうござるによつて、今日はどれへぞ遊山に出うと存ずる」とある。大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本は「此間は何方ゑも遊山に参らぬ。けふは射のべに出ふと存る」、虎光本は「永々在京致処ニ心が屈シて悪敷御座ルニ依てけふはどれへぞ野遊山ニ出ふと存ル」とあって、大蔵流は「（野）遊山」と言う場合が大勢を占めている。

和泉流は、天理本に「大名、かくれもなひゐてじや」「野あそびにゆかふ」「弓のふを云て、一二辺まわる」、和泉家古本に「かたのごとくもいてじやト名乗・野あそひにゆかふ」「弓ノフヲ云テ・一二遍マハル」、古典文庫本に「隠れもない射てです　此中は何方へも出ぬ　けふハ野へ出て鳥を射て慰うと存る」、狂言集成本に「隠れもない射手です。今日は野辺へ狙ひ物に出うと存ずる」とある。

狂言記外五十番は「今日は遊山に出ふ」と言う。天正狂言本は「今日は鹿かりに行　したく申せ　さてかりに出る」とあって、鹿狩りに行くことを明記している。

以上、鷺伝右衛門派では表現が一定しないが（享保保教本は、「野遊び」とあって、虎明本・天理本に同じ）、少なくとも常磐松文庫本は、「ねらいに出う」とあって、狩りに行くことを間接的に表現している。また、鷺仁右衛門派では、杭全本を除いて、狩りに行くことを明確に言う。

大蔵流では、江戸初期以降おおむね「（野）遊山」に行くという表現に統一されるようになる。ただし、伊藤源之丞本は「射のべ」に出ると言う。

和泉流では、古来「隠れもない射手」と名乗る。天理本・和泉家古本では

「野遊び」に行くと言うが、右の名乗りからすると、やはり狩りに行くことを示しているといえよう。しかし、せりふの上では、「狩りに行く」とは言わないのである。

春日本の「野狩り」という表現は、管見の範囲の他の鷺流台本や他流台本には見当たらないが、概して、狩りに行くことをせりふで明言する鷺流、特に仁右衛門派の表現に沿うものといえよう。しかもこれは、「鹿かりに行」「かりに出る」と明記する天正狂言本の記述にも合致するのである。他流では、弓矢を携えるという出立のレベルで、狩猟に出かけることを示しながらも、せりふのレベルでは、「狩り」という言葉を避ける傾向にあるといえよう。結末（謡で留める）の祝言性に合わせて、殺伐とした雰囲気を和らげるように意図したためか。

以上により、この部分は、狩りに行くことを間接的に表現する鷺伝右衛門派より、直接的に言う鷺仁右衛門派（杭全本を除く）に近い。また、そのことは天正狂言本の記述を継承したかたちでもあり、これは鷺流（しかも仁右衛門派のみ）に残存した、部分的「古態」[1]の一種と認めてよいのではなかろうか。

【猿歌・前歌】

猿引きの嘆きにより、「猿の皮を借りる」ことを断念した大名は、猿の命を助けると言う。喜んだ猿引きは、猿を大名の前で舞わせることにする。そこで猿引きによって謡われるのが「猿歌」である。この猿歌に合わせて猿が舞うことになる。長大であるので、全体を前歌・本歌・祝言歌[2]の三つに分けて検討することにする。まず、祝言的な内容の前歌から検討する。春日本は以下の通りである。

猿が参りて御知行まさる目出度ゥ能ゥ仕る　おどるが手元小腰ゥゆうり合セて舞ゥたる風情の面白さよ　舟の加勢につう立チ上リツテ棚を見よやれ
天より宝があま下りて人命草木曽正すれんバ小池小川水南ミ表の泉水ようじふ万里か間ダハ恵方たり　浦をこウぐハゑぞか嶋なさハ友舟こうぎよせて積ンだる宝は何ニ〳〵　あやが千反錦キガ千反唐折りなんとの納メようこそおもしろけれ

鷺伝右衛門派の享保保教本は「ヱイ猿カ参リテ御知行真猿目出度能仕ル　躍カ手元小腰[3]■合テ舞タル風情ノ面白サヨ　舟ノセガイニツヽ立上ツテ棚ヲ見ヨヤレ　天ヨリ宝ガ天降ツテ人命草木相生スレハ小池小川ノ水南面ノ泉水ヨウゼウ万里ガ間ハ衣方タリ　浦ヲ漕ハ蝦夷嶋汀ハ共舟漕寄テ積タル宝ハドレンドレ綾ガ千端錦ガ千端唐織り抔ノ納様コソ面白ケレ（替ノトメ　風ノ難ト火ノ難ト悪魔ヲ払ハ獅子ノ舞共云）」とある（「此文句替」として、「万里カ間ハ衣方タリ　招得ナラバ弓手馬手取ナヲイテ乗ツタリヤ久六　サイタリヤ才六　扨又舟ノ帆ノ手ヲ見レバ十二ノ水手ヲハラリトウテバ八ツ拍子ハ揃タリ　嶺ノ松ニ衣ヲ引ハ沢辺ノ鶴ガ羽フシヲナラベテハリヤ飛ンタリ曲シユンタリ」、また、「短クスル時」として、「ヲトルカ手元猿ハ山王立御厩ノ春ノ駒ガハナヲ揃テ参リタリ」と記す）。常磐松文庫本は「ヱイ　猿が参りて御知行増る目出度や能仕る　おどるが手元小腰ゆり合て舞たる風情のおもしろさよ　船のせがひについたち上て棚を見よやれ　天より宝があま下りて人妙草木相生す□□小池小河水南面の泉水陽ぜう万里が間ハ恵方たり　浦をこぐハゑぞが嶌なきせハ友舟こうぎ寄てつんだる宝ハなに〳〵　綾が千反錦が千反唐折何ぞの納めようこそ面白けれ」とある（「初手の句替」として、「泉水よふぜう万里か間ハ恵方たり　正徳ならハ弓手目出度　さいたりや斎六呑うたせりや久六　さつて海の表を見れは十二のかつこをからりつと討ば　やと〳〵〳〵〳〵　ハ拍子ハ揃ふたか浦をこぐハゑそうしま」と記す）。

鷺仁右衛門派では、寛政有江本「猿が参りて御知行まさる目出う能う仕ル　踊や手もとに腰をゆり合て舞たる風情の面白さよ　猿ハ山王まさる目出たき曲主につつ立挙て棚を見よかし　天より貨かあまくたりてそうしやうすれハ綾や千反錦や千反唐織物そ納よ」、杭全本「ヱイ〳〵猿カマイリテ御チキヤウマツサル目出トウ能仕ル　ヲトルヤ手本小腰ユリ合セテ舞タル風ノ面白サニ猿ハ山王。マサル目出慶王[ママ]慶王朱ニツヽ立上ツテタナヲミヨカシ　天ヨリ宝カ天下ツテソウセウスレハアヤヽ千端綿[ママ]ヤ千反唐織物ノ納メヨフニワ」、安政賢通本「えい〳〵。猿が参りて御知行まさる目出たう能仕る。踊るや手許小腰揺り合はせて舞ひたる風情の面白さに、猿は山王まさる目出たき鷁首に突つ立ち上がつて棚を見よかし。天より宝が天下つて相生すれば、綾や千反錦や千反、唐織物の納めやうには」（賢茂五番綴本もほぼ同じ。ただし「鷁首」を「ぎよくしゆ」とする）とある。

大蔵流では、虎明本「まさるめでたきのふ仕るおどるがてもと、まきみまや、春のこんまが花をそろへてまいりたり」（後記に、「御知行まさるめでたきのふつかまつるおとるが手もと、たちみまやにまきおろしの、はるのこまが

はなをそろへて参りたりや、もとよりたいこはなみのをとよりくるなみを、たとへ申せは、しんによのさえづり、おんかくのこゑ、しよほうじつさうとひゞきわたれは、ちからいづみがさうじやうして、天よりたからがふりくだる、ありやきやうがり、きよくしんなりと」とある）、虎寛本「ハア、猿が参りて、こなたの御知行まつさる目出度い能仕る。おどるが手本たちみ馬や、牧おろしの春の駒が、鼻をそろへて参りたり。もとより鼓は波のおと、よせくる波をかぞへ申せば、真如の囀り音楽の声、諸法実相とひゞき渡れば、地よりいづみが相生して、天より宝が降り下る」とある（山本東本、茂山真一本もほぼ同じ）。

大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本は「さるは山王、まさる目出度。おどるが手本たちみまやの、まきおろしに春の駒がきのまきおろしが、小池小川さをの水上、南おもてのせん水に、つんだる宝は何々ぞ、あやが千端錦が千端、唐織物おさめやうには、月のなん、日のなん、悪ㄏを払ふ目出度さよ」、虎光本は「イヤア猿が参て能仕　こなたの御知行まさる目出度（目出たや）　踊るが手元立見馬屋　まきおろしの春の駒が　花を揃て参りたり　元より鞁は浪の音寄来ル浪をかぞへ申バ　真如の囀リ音楽の声　諸方実相と響渡れバ　地より泉がさうじやうして　天より宝が降下ル」とある。

和泉流では、天理本「まさるめてたきのうつかまつる、おとるか手もとたちまわり、かたにこしをゆり合、しつやかにまふたりけり、八つのかつこをはらりとうては、十二の楽もそろふたり、それもんかくのすゝの音は、よせくる波にたとへたり、つくしくたりの西国ふね、ともに八町へに八町、十六ちやうのろかいをたて、しもにん〳〵のたからの中に、あややれうら、きんらん・とんす・ねりやう・くちは・からおり物、かゝるめてたきたからの中に、火とる玉・水取玉」（和泉家古本もほぼ同じ）、古典文庫本「猿が〳〵参りて御寿命御知行まさるめでたき能仕る　踊るが手もと立まはり肩に小腰をゆり合せしつやかにまふたりけり　八つの羯鼓はらりとうてば十二の楽もそろふたり　それ音楽の鈴の音ハよせくる浪にもたとへたり　筑紫下りの西国舟艫に八丁舳に八丁、十六丁の櫓櫂をたてしもにん〳〵の宝の中に綾や綾羅金襴純（ママ）子ねりやくちば唐織物　かゝるめでたきたからの中に、火とる玉水とる玉」、狂言集成本「まさる目出度きのふ仕る。地「踊が手本と立ちまはり。かたに小腰をゆづり合はせ。しづやかに舞ひたりけり。筑紫下りの西国船。艫に八丁舳に八丁。十六丁のろかいをたてゝ。しもにん〳〵の宝の中に。ひとる玉。水とるたんま」とある。

狂言記外五十番は「猿は山王まさるめでたい　まつきおろしの春の駒が　鼻をつるべて参りたるぞや　白かね黄金御知行まさるめでたきましよ」とある。天正狂言本には、このような猿歌は全く記載されておらず、「猿引きが猿を舞わせる」という記述もない[4]。

春日本は、特徴的な表現の傍線部を含めて、鷺伝右衛門派諸本とほぼ一致する。なお、傍線部のうち「あやが千反錦キガ千反唐折りなんとの納メよう」の箇所は鷺仁右衛門派にもあり、大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本にも一部近い文句がある（傍線部）。総じて、大蔵流・和泉流・狂言記外五十番は、それぞれに詞章が大きく相違しており、重なり合うところはほとんどない。以上をもって、春日本の猿歌のうちの前歌は、鷺伝右衛門派の特色を備えているとみてよいであろう。

【猿歌・本歌】

春日本の本歌は以下の通りである。

①イヤましハ上手者　舟が上手〳〵シヤ

②舟の中ニは他れとおよろやのう　他れとおよろやのう　イヤ戸間を敷キ寝の梶枕〳〵

③イヤ松を葉越シに月見れは　（「月を見ませい〳〵）月見れバしばし曇りてまたさゆる〳〵

④イヤ鳥羽のかんじゆがおりやろにやのう　四ツ辻で〳〵

⑤イヤひん田の横田の若苗を〳〵よ　しよんぼりしよぼりと植へたまう〳〵

廻てサラリと　今来る嫁がかろづよのうはらたちや

⑥非ん田の踊ハおもしろや　一ト踊り　おもしろや

鷺伝右衛門派の享保保教本[5]には、「①小哥イヤ明日ハ出ズ物　舟カ出ウズ物〳〵思タ気モナクヲヨル殿子ヤ〳〵、②イヤ舟ノ中ニハ何トヲヨロノ　篷ヲ敷寝ニ楫枕〳〵、③イヤ松ノ葉越ニ月見レハ　松ノ葉越ニ月見レハシバシ曇テ又サユル〳〵、④鳥羽ノ勘十ガヲリヤロヤラ〳〵　犬カホへ候四ツ辻テ〳〵、⑤小哥ヒン田ノ横田ノ若苗ヲイヤ〳〵シヨンボリシヨボリト植タ物〳〵　今クル嫂カ苅スヨノ　腹立ヤ、⑥イヤヒン田ノ躍ハ一躍〳〵、⑦イヤ釣瓶ハ九ツ身ハ一ツ〳〵　ツルベヲ枕ニ桶ヲコカゲニ〳〵」とある（「替ノ小哥」として、「〇イヤ若衆恋ニヤ寺カヨイ〳〵　菊ノ下葉テ夜ヲ明ス〳〵、〇イヤ寝カヨヤレサ

テ菜ノ中ニ〳〵　何名ノ立菜ノ中ニ〳〵、○ィヤ天ニ大悲ノ風吹ハ〳〵地ニハ金ノ花カ散候〳〵、○小哥是成ル御庭ヲ今朝見レハイヤ〳〵金ノ舛テ米ハカル〳〵」を記す）。常磐松文庫本は、「①引哥いやアあすハじよすもの　船が出ふづ物　いや　重たげもなとおよる殿子や〳〵、②いや松の葉越に月見れバ〳〵　哥しバし雲りて又さゆる〳〵、③鳥羽のくわんじゅがおじやろやら　いやア　犬がほへそろ四ツ辻で〳〵、④いや比田の横田の若苗をしよんぼりしよぼりと植た物〳〵　いや　今くる娵ハ苅ずよの腹立ちや、⑤いや　比田の踊りハ一おとり〳〵」とある（「猿哥の替」として、「○比田の横田の若苗をいかにも小腰をかゝめてしなやかに踊りませい　しなやかに〳〵、○いやア比田の横田の若苗をしよんほりしよほりと植たもふ〳〵」を記す。さらに「二度目哥替」として、「・汲た清水に影見れば　いや　我身ながらもよい男〳〵、・舟の中ニハ何とおよるぞ　とまをしとねにかじ枕〳〵、・天に大悲の風吹ばいや　地にハこがねの花か咲候〳〵、・四角柱や丸柱〳〵　いや兎角まろいハ猶よけれ〳〵、・とゞろ〳〵と鳴神も　いやこゝハ〳〵わばらよもおちじ〳〵、・是のお庭をけさミれば　いや　くがね升にてよねはかる〳〵」と記す）。

鷺仁右衛門派では、寛政有江本に「①哥あすハ出ふす物船か出ふす物いや〳〵ィヤおもたけもなとおよるやのおよるやの、②ィヤ船の中にハなにとおよるそィヤとまをしきねにかちまくらに〳〵、③松の葉こしに月見れはィヤ〳〵ィヤ　しほりと月見れはィヤしハしくもりて又さゆる〳〵、④ィヤ爰にふたりか　さて名の中にィヤ〳〵ィヤいと、名の立名の中に〳〵、⑤ィヤ新田横田のしよんほり〳〵と小こしをかゝめてうへたものィヤ今来るよめか刈ふすよの、⑥ィヤ汲た清水に影見れはィヤかけを見よ〳〵かけ見れはィヤ我身なからも能男〳〵、⑦ィヤ四角柱やかとはしらィヤ〳〵ィヤかとのないこそいよけれ〳〵、⑧ィヤいとしとのこの御座るやらィヤ〳〵ィヤ犬かほいそろ四辻て〳〵、⑨ィヤとゝろ〳〵と鳴神もィヤ〳〵爰ハ〳〵わはらよも落じ〳〵、⑩ィヤ天に大悲の風吹はィヤ〳〵ィヤ地にハ金の花か咲〳〵」とある。

杭全本には、「①イヤア明日ハ出スモノ舟ガ出スモノ〳〵　イヤアヲモタゲモナトヲヨルヨノ〳〵イヤア」と記した後に、「②舟ノ中　③新田ノ横田ヵヘシナリ　シヨンホリ〳〵　今クルヨメ　④松ノ葉コシ　⑤爰ニ寝ヨカサテ　⑥汲田清水　⑦四角柱ヤ　⑧イトシ殿御　⑨ト、ロ〳〵ト　⑩天に大日」と本歌の初句のみ記す。

安政賢通本は、「①いや。明日は出うずもの船が出うずもの。いや、明日は出うずもの。いや。思たげもなとおよるよの〳〵。②いや。船の中には何とおよるぞ。いや、船の中には、いや。苦を敷き寝に楫枕、楫を枕に。③いや。新田の横田の若苗を、いや、新田の横田の、いや。しよんぼりしよぼりと植ゑたもの。いやしよんぼりしよぼりと、いや。今来る嫁が刈らうずよの腹立ちや。④いや。松の葉越しに月見れば、いや、松の葉越しに、「いや。月見ればいや。しばし曇りて又冴ゆる〳〵。⑤いや。ここに寝よかさて菜の中に。いや、ここに寝よかさて、いや。いとど名の立つ、菜の中に〳〵。⑥いや。汲んだ清水で影見れば、いや、汲んだ清水で影見れば、いや。影を見よ〳〵。「いや。影見れば、いや。わが身ながらもよい男〳〵。⑦いや。四角柱や角柱、いや、四角柱や、いや。角の無いこそ添ひよけれ〳〵。⑧いや、いとし殿御のござるやら、いや、いとし殿御の、いや。犬が吠え候、四つ辻で〳〵。⑨いや。とどろ〳〵と鳴る神も、いや、とどろ〳〵と、いや。ここは桑原よも落ちじ〳〵。⑩いや天に大悲の風吹かば、いや、天に大悲の、いや。地には黄金の花が咲き候、花が咲く」とある（賢茂五番綴本も同じ）。

大蔵流の虎明本には、「①こなたの庭を、けさこそみたれ、こがねのますで、よねをはかる、②是から在所まで、日がくれうかよ十郎、かたわれ月はいよ、よゐの程よなふ、③ひんだのよこたの若なへを、しよんぼりしよぼりとうへたもの、今よぶよめがからふずよなふ、はらたちや、④ひんだのおどりをひとおとり〳〵」とあり、四つの本歌を記す。

虎寛本は、「①ハイヤハア、きやうがりきよくしゅんたり。こなたの御庭を今朝こそ見たれ。イヤ、こがね升にて米はかる、〳〵。②明日は出やうず物、舟が出やうずもの。おもたげもな〳〵およる男御よ、〳〵。③夜さのとまりはどこが留まりぞ。那波か坂越か、室が泊りよ、〳〵。④舟の中には何とおよるぞ。苦を敷寝の梶まくら、〳〵。⑤淀の川瀬の水車。誰を待やらくる〳〵と、〳〵。⑥木幡山路に行暮て、月を伏見の草枕、〳〵。⑦是から在所まじや日が暮れうか。与十郎。かたはれ月は、イヨ、宵の程よの、〳〵。⑧松の葉ごしに月見れば。イヤ、しばし曇りて又さゆる、〳〵。⑨いとし殿御のござるやら、犬が吠え候四辻で、〳〵。⑩とゞろ〳〵と鳴神も、こゝは桑原よも落じ。〳〵。⑪吾妻下りのとのは持たねど、嵐吹けとはさらに思はず、〳〵。⑫くんだる清

水で影見れば、我が身ながらも能いとのご、〳〵。⑬ひんだの横田の若なへを、〳〵。しよんぼり〳〵と植たもの。今くる嫁がからうずよの。腹立や。⑭四角柱やかど柱。かどのないこそそひ能けれ、〳〵。⑮ひんだのおどりは是までぞ、〳〵」とあり、虎明本の三倍以上の歌を記す（山本東本も同じ、茂山真一本は、①②④⑤⑦⑧⑥⑨⑬⑭⑮という順で謡い、③⑩⑪⑫はなし）。

大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本は、「①扨も、目出度の秋津須須（ママ）や、〳〵。こがね升にてよねはかる、〳〵。②是から在所迄日が暮か、与十郎。かたハれ月は、宵の程よの、〳〵。③こハた山路に行暮て、月を伏見の草枕、〳〵。④爰に寝よか、かしこに寝よか。いとし名の立なの中に、〳〵。⑤いとし殿ごの御座るやら、犬がほゑ候四辻に、〳〵。⑥四角柱や角柱、角のないこそ添ひよけれ、〳〵。（○船の内には何とおよるぞ、〳〵。苦を敷ねにしつかりと、梶を枕に、〳〵。）⑦夜さのとまりはどこがとまりぞ、〳〵。なばかさこしか、扨は尾上か高砂か、〳〵。⑧松の葉越に月見れバ。詞月をみたち。月にくもりて又さゆる。〳〵。⑨ひん田の横田のあさなゑを、しよぼり〳〵と植たまふ、〳〵。今来るよめが苅うずよの、〳〵。⑩ひん田のおどりハ是迄ぞ、〳〵。（小哥「船の内には何とおよるぞ。とまを敷寝にしつかりと梶枕、〳〵。」抔とも諷也。）」とある。

虎光本は、「①ハリヤ興有きよくしゆんたり　扨も目出度の秋津渕（洲）や　〳〵　此方の御庭を今朝社見たれ　〳〵　イヤこがね舛ニて米はかる　〳〵、②ましが留リハどこが留リよ　〳〵　なばかさこしか宝か明石か　扨は尾上か高砂か　〳〵、③是から在所迄（迄は）日が暮よ（暮ふ）か　与十郎　方割月は宵の程よの　〳〵、④松の葉越の月見れバ　〳〵　猿引「イヤ暫し曇リて又さゆる　〳〵、⑤イヤ木幡山路を分ケ行ば　月を伏見の艸枕　〳〵、⑥淀の川瀬の水車　〳〵　誰を待やらくる〳〵と　〳〵、⑦ましハ上手物　船が上手物　船の中ニは何とおよるぞ　〳〵　「イヤ苦を鋪寝の楫枕　〳〵、⑧いとし殿御と伽羅の香は　幾夜留てもとめあかぬ　〳〵、⑨イヤ汲たる清水ニ影見れバ　我身乍もよい男　しほらしや、⑩とゞろ〳〵と鳴神も　爰は桑原よも落ぢ〳〵、⑪ひんだの横田の若苗を　〳〵　猿引「いやしよんぼり〳〵と植た物　今来ル娘が苅ふずよの　腹立や、⑫ひん田の踊リハ面白や　〳〵」とある。

和泉流では、天理本・和泉家古本には、本歌に相当する歌謡は一切記載されていない。古典文庫本には、「①ひ田の踊りは、おもしろやおもしろや　ハア、②扨もめでたの秋津洲や、黄金舛にて米（ヨネ）はかる米はかる、③お庭に〳〵花が咲さふらふ、花は白銀実はこがね実は黄金、④舟の中には何とおよるぞ（中略）苦をしきねに楫をまくらに楫を枕に、⑤よさの泊りはどこが泊りぞ、なばかしやくしかむろがとまりかむろがとまりか、⑥いとゝ名のたつ秋風に、たそよ妻戸をきり〳〵すきり〳〵す、⑦いとし殿子のござるやら（中略）犬が吼さふらふ、よつ辻に四つ辻に、⑧ひ田の横田のあさ苗を、しよほりしよぼりとうゑたもの　今くるよめか、からうずよの腹立や、⑨松の葉越に月ミれバ（中略）しばし曇りて又さゆるまたさゆる、⑩ひ田の踊りは是迄そ〳〵」とある。狂言集成本は、「①ひんだの踊は面白や、②扨もめでたの秋津洲や、③船の中には何とおよるぞ、④木幡山路を過ぎ行けば、⑤いとし殿御の御座るやら、⑥松の葉越しに月見れば、⑦ひんだの横田の若苗を、⑧ひん田の踊は是迄ぞ」（以上、初句のみ）を記す。

狂言記外五十番は、「①ひんだの踊りは一踊り　〳〵、②こなたのお庭をけさ見れば　〳〵　黄金の舛で米をはかる　〳〵、③三ケ月なりの鎌ほしや　〳〵　妻もろともに草を刈らふ　〳〵、④船の中には何とおよるぞ　〳〵　とまを敷き寝に楫を枕に　〳〵」と四首を記す。

春日本の本歌は六首だけで、現行諸流に比べると比較的少ない。鷺伝右衛門派の享保保教本の②～⑥は、春日本の本歌②～⑥にほぼ一致する（①は崩れたかたち）。また、常磐松文庫本の②～⑤は、春日本の③～⑥と一致する。歌の数においても、常磐松文庫本（五首）は春日本に近い。

一方、鷺仁右衛門派の寛政有江本は、②③⑤が春日本の②③⑤（⑤は小異有り）にほぼ一致する。杭全本の②③④は、春日本の②⑤③に一致する。しかし、他の歌は全く重ならない。また、安政賢通本・賢茂五番綴本の②③④も春日本の②⑤③に一致するが、他の歌はやはり重なるものがない。

大蔵流虎明本の③④は、春日本の⑤⑥と一致する。特に④の表現は、（小異あるものの）鷺伝右衛門派の享保保教本⑥及び常磐松文庫本⑤と同じである。虎寛本は十五首を記すが、④⑧⑬が春日本の②③⑤に一致するのみで、あとは重ならない。

大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本は、注記として付された「船の内には何とおよるぞ」、⑧⑨が春日本の②（小異あり）③⑤（「植たまふ」が一致）と同じである。虎光本は、④⑦⑪が、春日本の③①②⑤と重なる。特に⑦の傍線部

「ましハ上手物　船が上手物」という部分は、春日本で①とした歌に近く、他流他派に見られないものとして、注目すべきである。虎光本のように、春日本の①と②は一つの歌と見るべきなのかもしれない。この部分は、鷺伝右衛門派でも、享保保教本「明日ハ出ズ物　舟カ出ウズ物〳〵　思タ気モナクヲヨル殿子ヤ〳〵」、常磐松文庫本「あすハじよすもの　船が出ふづ物　いや　重たげもなとおよる殿子や〳〵」（この歌は、鷺仁右衛門派諸本・大蔵流虎寛本にも上記と同じかたちで収める）とあって、いずれも波線部が相違し、追加されているので、春日本とは重ならないのである。なお、虎光本の⑫「ひん田の踊リハ面白や」は、春日本の⑥に極めて近いことも付け加えておかねばならない。

和泉流では、古典文庫本の④⑧⑨が、春日本の②⑤③に相当する。また、①が春日本⑥に近い。狂言集成本は、③⑥⑦が、春日本の②③⑤に同じである。いずれもその他の歌は一致するものがない。

狂言記外五十番の①④は、春日本の⑥②と重なる。とりわけ①の傍線部「ひんだの踊りは一踊り」という表現は、鷺伝右衛門派諸本と大蔵虎明本（小異あり）に共通して見られるのみで、鷺仁右衛門派や虎明本以外の大蔵流諸本、和泉流諸本には全く見えない。ただし、春日本⑥は「非ん田の踊ハおもしろや　一ト踊り　おもしろや」という詞章であり、虎光本⑫「ひん田の踊リハ面白や」（古典文庫本の①にも）との共通部分もある。

以上により、春日本の猿歌・本歌六首は、基本的に鷺伝右衛門派諸本との一致度が高いといえよう。春日本の④「鳥羽のかんじゆがおりやろにやのう　四ツ辻で〳〵」は、管見の範囲では、鷺伝右衛門派の享保保教本（④）・常磐松文庫本（③）のみに見える歌である。ただし、春日本の①②は、二首を合わせたかたちとして、大蔵八右衛門派の虎光本⑦に近く、また春日本⑥の詞章は、虎光本⑫あるいは古典文庫本①の詞章に、鷺伝右衛門派諸本・大蔵虎明本・狂言記外五十番に見える「一踊り」を加えたような表現であることを指摘しておきたい。

【猿歌・祝言歌】

大名は、猿の舞を真似つつ、靱を持って舞い、めでたく舞い納める。キリの謡となる春日本の祝言歌の詞章は、以下の通りである。

一の幣立チ二の幣立チ三に来る駒四七のようどれ　舟頭殿こそ勇健なれ
とまり〳〵を永かめつゝ彼ノ亦獅子と申するハはくさいごくより普限文珠（ママ）（ママ）
のめされたる　さると獅子トハ御使者の者　猶千秋や万歳とたわらをかさねて面々に　（「俵を重ねい〳〵）　俵をかさねてめん〳〵に俵をかさねて面々に〳〵〳〵たのしゆう成こそ目出度ける（ママ）

鷺伝右衛門派の享保保教本は、「ヱイ一ノ幣立二ノ幣立三ニ黒駒信濃ヲトレ船頭殿コソユウケンナレ　泊々ヲナカメツ、カノ又獅子ト申ニハ百済国ヨリ普賢文殊ノ召レタル猿ト獅子トハ御仕者ノモノ　猶千秋ヤ万歳ト俵ヲ重テメン〳〵ニ　言葉俵ヲ重イモ一ツ重イ　俵ヲ重テメン〳〵ニ楽フ成ルコソ目出タケレ」とある。常磐松文庫本は、「英い　一の幣立二の幣立三に黒駒信濃をどれ　舟頭殿こそゆうけんなれ　泊り〳〵を詠めつゝ彼の又獅子と申するハ百済国にてふげん文殊の召れたる猿と獅子とハ御使者のもの　猶千秋や万歳と俵を重て面々に　詞俵を重ませい〳〵　たわらを重てめん〳〵に俵を重て面々に〳〵たのしう成こそ目出度けれ」とある。

鷺仁右衛門派では、寛政有江本「一のへいたて二のへいたて三に黒駒信濃をとれ　船頭殿こそ勇健なれ　泊り〳〵をなかめつゝ彼又獅子と申にハ百済国にハ普賢文殊のめされたる猿と獅子とハお支者のもの　猶千秋ハ万歳そと俵を重て面々にタハラヲ〳〵たハらを重てめん〳〵にたのしうなるこそ目出たけれ」、杭全本「一ノヘイタテ二ノヘイタテ三ニ黒駒シナノヲトレ　舟頭殿コソユウケンナレ　トマリ〳〵ヲナカメツ、尚千秋ハ万歳ト俵ヲ重テメン〳〵ニ〳〵〳〵楽シウナルコソ目出ケレ」、安政賢通本「一の幣立て二の幣立て、三に黒駒信濃をとれ。船頭殿こそ勇健なれ。「泊り〳〵を眺めつつ。なほ千秋は万歳と、「俵を重ねて面面に〳〵、俵を重ねて面面に、楽しうなるこそ目出たけれ」（賢茂五番綴本も同じ）とある。

大蔵流は、虎明本「一のへいだて二のへいたで（ママ）、三にくろごましなのをとれ、せんどう殿こそゆうけんなれ、とまり〳〵をながめつゝ、彼またしゝと申には、はくさいこくにてふげんもんじゆのめされたる、猿としゝとはごししやのもの、猶せんしうや、ばんぜいと、たわらをかさねてめん〳〵に、〳〵たのしうなるこそ、めでたけれ」、虎寛本「イヤ、一のへいだて二のへいだて、三に黒駒信濃をとれ。舟頭殿こそゆうけんなれ。泊り〳〵を詠つゝ。かのまた獅子と申には、百済国にて普賢文珠のめされたる、猿と獅子とは御使者のもの。猶千秋や万歳と、俵を重てめん〳〵に、〳〵、〳〵、楽しう成るこそ目出たけれ」（山本東本も同じ）とある。

大蔵八右衛門派は、伊藤源之丞本「一の幣立二の幣立、三に黒駒しなのおとり、船頭殿こそゆうけんなれ。（とまり〳〵を詠ツ、ゝ）扨又鹿と申するは、百済国にて普賢文殊の召れたる、猿と鹿とは御使者のもの、猶千秋や万歳と、たハらを重てめん〳〵に、〳〵〳〵、たのしう成こそ目出度けれ」、虎光本「イヤア一の幣立二の幣立　三に黒駒信濃をとれ　船頭殿社ゆうけんなれ　とまり〳〵を詠つゝ　かの又獅子と申ニは　百済国ニて普賢文珠の召れたる猿と獅子とハ御使者のもの　猶千秋や万歳と　俵を重而面々に　〳〵　〳〵　楽ふ成ルこそ目出たけれ」とある。

和泉流は、天理本「むこ殿の舞のたもとのおもしろさに、いたせるこまはとれ〳〵そ、一のへいたて、二のへいたて、三にくろこましなのをとおれ、せんとう殿こそいふけんなれ、此又しゝと申には、ふけん・もんしゆのめされたる、猿としゝとは御ししやの物、是おは御世に納めおき、なをせんしうやはんせいと、たわらを重てめん〳〵に、〳〵、たのしうなるこそめてたけれ」（和泉家古本もほぼ同じ。傍線部は「是をは御世に納めつゝ」）、古典文庫本「一閉伊だて二閉伊だて、三にくろ駒しなのをとれ、船頭殿こそゆうげんなれ、とまり〳〵をながめつゝ猶千秋や万歳と、俵を重ねて面々に〳〵、〳〵、たのしうなるこそめでたけれ」、狂言集成本「猿と獅子とはお使者の者。これをば御代に納めつゝ。猶千秋や万歳と。俵を重ねて面々に。〳〵。たのしうなるこそ目出度けれ」とある。

狂言記外五十番は、「一のへゐだて　〳〵　二のへいだて　三の黒駒信濃おどり　俵を重ねて面〳〵に　〳〵　〳〵　〳〵　楽しくなるこそめでたき」とある。

春日本の傍線部「彼ノ亦獅子と申するハはくさいごくより普限文珠のめされたる　さると獅子トハ御使者の者」は、鷺伝右衛門派、鷺仁右衛門派の寛政有江本、大蔵流、和泉流の天理本に共通する。鷺仁右衛門派の杭全本・安政賢通本・賢茂五番綴本などでは、傍線部の文句は削除されている。和泉流でも、古典文庫本・狂言集成本などでは削除されている（江戸中後期の書写とされる愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』[6]でも同様である）。

従って、傍線部の文句を江戸末期まで残していたのは、鷺伝右衛門派と大蔵流（二派）ということになる。さらに細部にわたるが、傍線部のうち「彼ノ亦獅子と申するハ」は常磐松文庫本（及び伊藤源之丞本の傍記〈本文は「扨又」〉）と同じである。享保保教本・寛政有江本・大蔵流諸本・天理本・和泉家古本は、「申すには」とする。以上により、春日本の祝言歌は、鷺伝右衛門派の本文の特徴を備えており、しかも常磐松文庫本と一致すると見てよいのではなかろうか。

この祝言歌とされる謡は、天正狂言本にはなく、虎明本や天理本などの江戸初期台本から見えるが、「猿聟」のキリの謡と同じであり、同曲から流用されたことが指摘されている[7]。「猿聟」は金春禅鳳作の能「嵐山」の間狂言であり（現在は替間）、禅鳳自身による「嵐山」上演の記録（『粟田口猿楽記』）がある永正二年以前の作と考えられる[8]ので、そこから取り込まれたことは確かであろう。例えば、天理本・和泉家古本の祝言歌には、「むこ殿の舞のたもとのおもしろさに」（波線部）という文句があるが、これは吉野の聟猿の舞に対して、それを喜んだ嵐山に住む舅猿が引き出物を揃えるという「猿聟」の内容に即した謡であり（「猿聟」では、「舅は是を見るよりも」から「聟殿のつたちあがる。舞の袂の面白さに」につながる〈狂言集成本〉）、聟の登場しない「靱猿」には全く不要の文句である。そのため、特に和泉流では、「猿聟」との重複を避けるため、「靱猿」祝言歌の文句を多く削除して、簡略化の方向をたどることになったものと推測される。

以上、春日本「靱猿」は、大名の「野狩り」に行くというせりふについては鷺仁右衛門派に近いところがあるものの、猿歌は、前歌・本歌・祝言歌のいずれにおいても、おおむね鷺伝右衛門の特徴をもち、とりわけ常磐松文庫本に近いことが確認された。ただし、本歌の細部においては、大蔵八右衛門派の虎光本に近い箇所も見出される。

34、「以品波」

曲名は「以呂波」の誤写であろう。この「以呂波」のみを記した春日庄作自筆本に収められる。同本四丁裏には「山口縣山口市街西端南部　阿部仙姿鶯／蔵章」と墨書するが、この阿部仙姿鶯とは、春日庄作の弟子（小鼓役者も兼ねていたらしい）・阿部福之助のことと考えられる[9]。

【いろはを教える相手】

春日本では、兄が登場し、自分の弟に手習いをさせようとする。

某シ弟を壱人持ツテ御座るか未ダ手ならいを致させませぬ　今日たさいじ

よふ吉日なれハ手習をさしよふと存る

鷺伝右衛門派では、享保保教本に「悴ヲ呼出イテ手習ヲ致サセウト存ル」とあって、本文は親子の設定であるが、注記に「仕手アトノ年ニヨリ弟ヲ一人持ツテ御座ルトモ云　ケ様ノ類何モ年頃ニヨリ子トモ兄弟トモ云　口伝」とあり、シテ・アドの年齢によって、兄弟にしてもよいとする。宝暦名女川本は「某おと〳〵を一人持て御座るが、呼出し、手習をおしようと存る」とあり、兄弟とする（ただし後記に「シテを子共ならは弟と成共、又、世悴と成共云也」とあるのは、享保保教本と同様の行き方）。常磐松文庫本は、「某弟を壱人持て御座るかいまだ手習を致させませぬ　今日は最上吉日成バ呼出いて手習を教ふと存る」とあり、兄弟という設定である。

一方、鷺仁右衛門派では、寛政有江本「某鉄法師を持て御座ルか是ハ常々小賢き者て御座ル依て呼出して学文を致させうと存ル」（あとに「己てゝに向ふて其如〳〵いわは」とあるので、親子の設定である）、杭全本「某弟を壱人持て御座る　申渡す子細が御座る」、安政賢通本「某弟を持つてござるが、所用ある間、呼び出さうと存する」、賢茂五番綴本「某弟を持て御座るが。諸用有間呼出ふと存る」とあり、寛政有江本以外は、兄弟とする。

大蔵流は、虎明本「今日さいじやう吉日で御ざる程に、かなぼうしをよび出いて、手習をさせうと存る」、虎寛本「某悴〔を〕一人持て御ざるが、今日は最上吉日で御座るに仍て、手習ひを致させうと存る」、伊藤源之丞本「某、悴を壱人持て居まするが、寺ゑ遣し、手習をさせうと存る」、虎光本「某かなほうしを壱人持て御座ルか段々成人致て御座ルニ依而手習を致させうと存ル」（「口まねをせいといへバ親ニ辱をかゝせる」とあるので、親子の設定）とあり、基本的に親子の設定である。

和泉流は、天理本「子を一人持て御ざあるが、はや成人仕たれども、いまだ、しろいくろいを存ぬ」（和泉家古本もほぼ同じ。「せがれ」と言う）、古典文庫本「悴も漸々成人致した程に寺へ上せ手習をさせうと存る」（狂言集成本もほぼ同じ）とあって、すべて親子の設定である。狂言記外五十番も同様（「せがれが成人した程に、手習ひをさせうと思ふ」）である。

鷺伝右衛門派は、享保保教本が親子・兄弟両方にする行き方を記すが、宝暦名女川本・常磐松文庫本ともに、兄弟の設定を主としている。鷺仁右衛門派も寛政有江本以外は、兄弟とする。鷺流両派は、江戸中期以降、兄弟とする方向に傾いたようである。それに対して、大蔵流・和泉流は、基本的に親子とする。春日本は、冒頭に「手習をさしよふ」と言うせりふがあることも考え合わせると、やはり鷺伝右衛門派の行き方に則っているといえよう。

【物の白い黒い】

春日本では、呼び出した弟と兄の間で以下のようなやりとりがある。

…此方ハ物の白ィ黒ィを知ツテ居さしますか　中々存しておりまする

白ィは鷺黒ィハ烏で御座る　兄「イヤ〳〵其黒ィ白いてハない　万ス物書くかと言ウ事しや

鷺伝右衛門派の享保保教本は「…白イ黒イヲ知ツタカ　シテ中々白イハ鷺黒イハ烏テ御座ル　アトイヤ其白イ黒イテハナイ　物ヲ書事ヲ知ツタカト言フ事シヤ」、宝暦名女川本は「アト「そちは白ひ黒ひをしつたか、シテ「中々、存ました、アト「なんと、シテ「白ひは鷺、黒ひは烏（カラス）て御座る、アト「そのしろい黒ひの事ではなひ、物をかくかと云事じや」、常磐松文庫本は「…わごりよハ物の白い黒いを知つて居さしますか　中々存て居りまする　シテ何と　白いは鷺黒いハ烏て御座る　イヤ〳〵其事でハない　惣じて物をかゝしますかといふ事じや」とある。

鷺仁右衛門派は、寛政有江本「段々と成人した事しやほとに学文をさしませ内々此方より申上度と存て居まして御座れは常々お隙の御座らぬを乍存申上もいかゝと控居まして御座ルか其儀ならは教さしられて被下」、杭全本「何と先白い黒いのわかちをしらしましたか　黒イハ烏白イハ鷺てこさる　是はよふ覚さしました（以下、東西について問う）」、安政賢通本「アド…わごりよも最早成人をさしましたによつて、手習いをさせうと思ふが、何とあらうぞ。シテ内内私の方より申し上げうと存ずるところに、仰せ出だされた。よいやうに御指南をなされて下されませい」（賢茂五番綴本も同じ）などとあって、杭全本以外は「白い・黒い」についての問答がなく、シテはいかにも殊勝な受け答えをする。

大蔵流は、虎明本「…さりながら、手ならひをすれは、しろひくろひをしらねはならぬが、なんぢはしつたか、「中々ぞんじた、まづしろひはさぎ、くろひはからすで御ざる　「其しろひくろひの事ではなけれ共、それほどがてんがいたれはよひ」、虎寛本「（親）去りながら、手習をするには白い黒いを知らねば成らぬが、知つてゐるか。（シテ）白いは鷺、黒いはからすで御ざる。（親）

其事ではなけれ共、夫程迄に合点が行ばよい」、伊藤源之丞本「アド「…扨、白い黒いを知らねばならぬが、是をも知て居るか。」シテ「中々。知て居ます。」アド「白いは。」シテ「鷺。」アド「黒いは。」シテ「からす。」アド「是も見事知て居る」、虎光本「アト「去乍手習をするにハ白イ黒イを知ねバ成ぬが白イ黒イを知て居さし舛か　シテ「白ハ鷺黒ハ烏で御座ル　アト「其ことでハなけれ共夫程ニ合点か行バよい」とある。

和泉流は、天理本「…其年になるまで白いくろいをしらぬほどに、寺へやらうと思ふ」と云、子「しろいくろいは存た」と云、「しろいくろいはなんじやと思ふぞ」と云、子「白いは鷺、くろいはからすじや」と云、「あふ、よふしつたよ、しろいくろいとはその事ではない、白いかみの上に〳〵ろい文字を書を、白いくろいをしつたと云よ」（和泉家古本もおおむね同じ）、古典文庫本「アト「寺へのほすも白い黒いをしらさうが為ぢや　シテ「夫ならば寺へ上るには及ひませぬ　白い黒いは存ております　アト「（中略）夫ならバ先白いは何ぞ　シテ「鷺　アト「黒いは　シテ「烏　アト「を丶ようしつた　白い黒いをしるといふは其事ではない　たとへば白い紙に黒い文字を書て夫を読あきらむるを白い黒いを知といふ」（狂言集成本もほぼ同じ）とある。狂言記外五十番は、ただちにいろはを教えることになり、「白い・黒い」に関するやりとりはない。

鷺伝右衛門派・大蔵流・和泉流には、「白い・黒い」の問答が存するが、中でも、弟（子）の「鷺・烏」という答えに対して、「物ヲ書事ヲ知ツタカト言フ事シヤ」（享保保教本）、「物をかくかと云事じや」（宝暦名女川本）、「惣じて物をか丶しますかといふ事じや」（常磐松文庫本）等の兄（親）の受け答えが、春日本（「万ス物書くかと言ウ事しや」）に最も近い。鷺仁右衛門派は、杭全本を除いて、この「白い・黒い」の問答がない。狂言記外五十番も同様である。大蔵流は、鷺や烏のことではないと言いながら、親は子の答えをそれなりに受け止め（杭全本はこれに近い）、和泉流は、「白い紙に黒い文字を書くことだ」とはっきり説明するのである。

【耳を引く】

春日本では、自分の口真似をすることに腹を立てた兄が弟の耳を引く所作がある。弟も兄と同じようにする。

「おのれハにくいヤツノ　こちへこひ　ト言ウてみ丶を引はり引まわし目付柱ノ方ナゲツケル　弟「アイタ〳〵　トこけて飛ヒおき兄のみ丶をとり引きわしワキ柱方ナゲ付

このくだりは、享保保教本に「（子は親の足を取ってこかす）追込也　如常口伝」とある後の注記に「又己ウセヲレト耳ヲ取引廻シヲノレガ様ナヤツハカウシタガヨイトシテヲコカスト又シテ右ノ通ニアトヲ乍云引廻テコカスモ有」と記す。なお、享保保教本に次ぐ宝暦名女川本には、耳を引くことは明記されない。弟は兄の「足を取り、兄を打たおす」とあるのみである。常磐松文庫本には演出注記がないが、「（兄）己れはにくいやつの　こちへこい　（弟）アイタ〳〵」という、春日本と同じやりとりがあるので、ここで耳を引く所作がなされた可能性はあろう。

なお、鷺仁右衛門派では、寛政有江本は「タカヒニウテマクリ組合アトカツ」と記すのみであり、比較的詳細な演出注記（型付）のある賢茂五番綴本には、耳を引くことは全く見えない。杭全本は、口真似の果てに相撲となるので、耳を引くくだりはないようである。

ところが、他流では、大蔵虎明本に「（親）「にくやなふ、なにとせうぞ「み丶をとりて、二へんばかり引まはし、のちすまふになりて、おやをうちたおひている、〳〵ちまねのこと〳〵」とあり、和泉流の和泉家古本にも「口マネノ内・オヤヲネメテ・かれといふ魚にならふそナト、云事アリ―腹ヲ立耳ヲツカマヘテマワル事ナト有」（天理本にはこのこと明記せず）とあって、腹を立てた親が子の耳を引き、そのまま引き回すことを記す。江戸前期の時点では、大蔵・和泉両流の本曲において、「耳を引く」所作が行われていたことは明らかである。しかし、その所作は、山本東本や古典文庫本を見る限り、江戸末期ひいては現行の演出には継承されていないようである。

春日本「宮城野」の項でも考察したが、この耳を引くことは、江戸初期には、さまざまな曲で行われていた。[10] しかし、それが現在まですべて受け継がれているわけではない。そうした所作が、春日庄作による明治期書写の「以呂波」に認められるのである。これは山口鷺流に残った江戸初期的古態の一つと認めてよいのではなかろうか。

以上により、春日本「以呂波」は鷺伝右衛門派の特色をもつと認められよう。

注

（1）拙稿「鷺流の「古態」―天正狂言本との関連を中心に―」（『藝能史研究』195、平23・10）で検討した事例に追加すべきものである。

（2）前歌・本歌・祝言歌の呼称は、北川忠彦氏「「靱猿」猿歌の成立時期について」（『狂言歌謡考』和泉書院、平8所収）による。なお、祝言歌（前歌）・ひんだの小歌・祝言歌（後歌）という呼び方もある（池田廣司氏『狂言歌謡研究集成』風間書房、平4参照）。

（3）難読。「揺」の旁のみを書いたか。注（2）の池田廣司氏『狂言歌謡研究集成』も「□」とする。

（4）天正狂言本「靱猿」の該当箇所は、「さてかたな小袖とらする　後猿になりてたらくわしやに引るゝ」とあり、大名が猿の真似をすることしか書かれていない。江戸初期以降の演出を参照して、大名が猿を真似る以上、その前提として猿の芸があったはずだと考えることもできるが、「何らかの芸をする（させる）」ことを明記していないのは、天正狂言本として異例のことである。ここの読みについては、別途考察する必要がある。

（5）以下、諸流台本の猿歌・本歌の引用に際しては、歌の間に入る猿引き他のせりふや演出注記は省略し、歌の詞章のみ掲げることとする。

（6）小谷成子氏・野崎典子氏「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題　九」（『愛知県立大学文学部論集　国文学科編』57、平21・3）による。

（7）池田廣司氏『狂言歌謡研究集成』（風間書房、平4）「靱猿」〈祝言歌〉（後歌）〔考説〕参照。

（8）橋本朝生氏「聟入り物狂言の諸相」（『続　狂言の形成と展開』瑞木書房、平24所収）。

（9）拙稿「山口鷺流台本の系統（二）（三）―春日庄作自筆本をめぐって―」（『山口県立大学国際文化学部紀要』7・8、平26・3、平27・3）参照。

（10）拙稿「山口鷺流台本の系統（五）―春日庄作自筆本をめぐって―」（『山口県立大学国際文化学部紀要』10、平29・2）参照。

〔付記〕
本稿は、平成二十八年～三十年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究「山口市に伝承される鷺流狂言の総合的研究」（課題番号16K02371）の成果の一部である。

On the Kyōgen Texts Written Down by Shunnichi Syōsaku Who Gave Instruction of the Kyōgen Play of the Sagi School to the People of Yamaguchi, Part Ⅵ

INADA, Hideo

Concerning the Kyōgen texts written down by Shunnichi Syōsaku, we considered the following points of the system of play script : 1) Shunnichi texts fundamentally have distinctive features of the Den-emon branch of the Sagi school. 2) Some parts of these texts, however, have in them some of the elements which are different from those of the Sagi school.